

特別支援教室「すばる」について



特別支援教室「すばる」は、平成15年度に、通級指導教室のモデル事業として設立されました。「すばる」では、地域における特別支援教育の充実を図るために、4つの事業（①教育相談事業、②個別指導事業、③研修教育事業、④研究開発事業）を行っています。「すばる」のスタッフは、香川大学教育学部・香川大学大学院教育学研究科の教員と附属坂出小学校・中学校・特別支援学校の教員で構成されています。場所は、附属坂出中学校の西側、坂出商業の北側に位置する2階建ての建物になります。

1階には、個別指導室兼教育相談室やプレイルーム兼研修室等があり、主に個別指導や教育相談の場として活用しています。2階には、スタッフと長期研修生の職員室や特別支援教育コーディネーターコースの院生用の研修室等があり、それぞれ日々の研修や指導の準備、「すばる」の運営業務等を行っています。



【特別支援教室「すばる」の4つの事業】

①教育相談事業

保護者や学級担任に対し、教育・就学・進路等に関する相談と助言を行っています。日常の学校生活における指導・支援方法、集団参加等の具体的な対応方法や家庭でのかかわり方等をアドバイスしています。平成29年度は、電話相談を含め116件の教育相談を実施しました。

②個別指導事業

香川県下の幼稚園・保育所に通っている就学前児、小学校・中学校の通常の学級に在籍している特別な教育的ニーズのある児童・生徒を対象に、放課後、指導者と1対1の個別指導の形態で、教科学習および社会性育成等について個に応じた指導を行っています。年度を3つの期間に分け、各期で週1回60分の指導を9~10回実施しています。個別指導では、アセスメントからお子さんの特性を把握したうえで、一人一人に応じた教材教具を使用し、できることや分かることが少しづつ増えるように、また、自信をつけたり自分に合ったやり方を見付けたりできるように指導・支援を行っています。子どもたちは、毎週、すばるでの学習を楽しみにしてくれています。平成29年度は、第1期：168回、第2期：161回、第3期：116回、合計445回の個別指導を実施しました。

③研修教育事業

現職教員等を対象とした理解・啓発のための研修や、各学校の特別支援教育コーディネーターを対象とした専門的な研修を実施しています。また、研修教育事業の一環として、香川県教育委員会より毎年2名の現職教員を長期研修生（1年間の内地留学生）として受け入れています。さらに、本教室は香川大学大学院教育学研究科高度教職実践専攻特別支援教育コーディネーターコースの指導実習の場となっており、大学教員の指導のもと、院生（現職派遣）が個別指導を実施しています。

④研究開発事業

学部教員ならびに附属学校園教員と共同して、心理アセスメント、教材開発、指導法等に関する研究を推進しています。

特別支援教室「すばる」の施設について

特別支援教室「すばる」での取り組みについて、これまでいろいろとお伝えしてきましたが、『実際、すばるの施設はどんな感じなの?』というお声をよくお聞きします。そこで、今回は特別支援教室「すばる」の施設について解説したいと思います。

特別支援教室「すばる」は、旧香川大学教育学部附属坂出小・中学校分室であった2階建ての建物を活用しています。1階には個別指導室兼教育相談室、プレイルーム兼研修室等があり、主に個別指導や教育相談の場として活用されています。2階には特別支援教育コーディネーター専修生用の研修室、スタッフと内地留学生の職員室等があり、それぞれ日々の研修や指導の準備、特別支援教室「すばる」の運営業務等を行っています。



特別支援教室「すばる」全景

初めて来られる方は、場所がよく分からないという方が多いのですが、『附属中学校の西側、坂出商業のすぐ北です。』とお伝えすると、大体の方は迷わずに来られます。駐車場も完備していますが、利用者が重なる日は、満車に近い状態になります。

◆ 1階の様子



個別指導室兼教育相談室

玄関が建物の東西に1か所ずつあります。指導室は4部屋あり、それぞれの室内にはホワイトボードやパソコンを常設して、個別指導に活用しています。また、お子さんの状態に応じて使用する机の種類や、室内のレイアウトを変えています。壁面等の掲示物を極力少なくし、視覚的な刺激を少なくすることで、お子さんが集中して学習に取り組むことができるよう配慮

しています。教育相談や個別指導前の面談、WISC-IV等の心理検査、県内外からの見学者への特別支援教室「すばる」の概要説明等もこれらの部屋で行います。



プレイルーム兼研修室

個別導終了後、お子さんが“お楽しみ”の時間として活動する部屋です。ストラックアウトやボウリングなど、体を動かして遊ぶことができます。昨年末新調したサイバーホイール（写真右）は、お子さんに大人気です。最近では、iPadのアプリで遊ぶお子さんも増えています。見学者が大勢来られる際は、この部屋でプロジェクター等を用いて、説明を行っています。

◆ 2階の様子



職員室兼研修室

2階の各部屋では、内地留学の先生方やコーディネーター専修の院生が、日々個別指導の教材研究や特別支援に関する研修を行っています。坂出学園の兼任スタッフの先生方も、研修室内にある専門書などを参考にしながら、個別指導の準備をされています。

特別支援教室「すばる」の個別指導事業



本教室の個別指導は、通級による指導を前提としており、在籍校・園との連携が不可欠です。例えば、個別のSSTは、指導者と1対1の受容的な環境で丁寧にスキルを学べる一方で、学習したスキルが日常生活で発揮されにくいという難点があります。そこで、学習した内容を保護者や担任に伝えて協力を求め、子どもが日常生活の中でスキルを実践し、成功体験を積み上げられるように働きかけます。

今回は、在籍校や保護者と連携しながら行った社会性に関する指導の事例を紹介します。

【コミュニケーションのつまずきへの個別指導の実際】

中学生Aさん

実態

担任・保護者とAさんからの聞き取り等

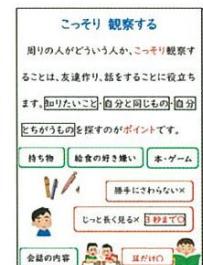
- ・友達とのコミュニケーションが苦手
- ・話しかけられると短く答えることはできる
- ・休み時間は読書をして過ごすことが多い
- ・話したい友達が何人かいるが、どう話しかけてよいか分からず（話しかける台詞・会話の内容・タイミング等）

担任・保護者とAさんからの聞き取り及びWISC-IV検査結果等

- ・周囲の友達の様子をよく観察している
- ・友達と話したいという気持ちがある
- ・自分が知っている言葉の知識や既に経験したことを具体的な言葉を用いて説明することが得意

指導内容①（話しかけるためのスキル）（楽しく話をするためのスキル）

- ・本人の気持ちの確認（今の気持ち・話しかける不安・願い等）
- ・話題見つけのためのこっそり観察（話したい友達の持ち物や興味・関心等）
- ・相手探し（時間がありそう・興味・関心が似ている・答えてくれそう）
- ・タイミング（相手が一人でいる時・教室移動の前後・機嫌等）
- ・初めの台詞（あいさつ・名前を言う・共通の話題で疑問形にする等）
- ・話している間の言動（相づち・視線・表情・声の大きさ・距離感等）



指導内容②（すばるでの実践練習）

- ・実際の相手・状況を具体的に設定
- ・指導者が相手となりロールプレイ
- ・iPadで撮影したロールプレイの振り返り
- ・実践のための目標設定・振り返り

指導内容③（学校での実践）

- ・記録
- ・実践

実行した場所・相手	日付	感想
部室	6/18	もやつといいね 西澤(西澤)
3年	6/18	ポン(いもじがやつ)

結果

- ・初めは、「話しかけるなんてできない」と言っていたが、ロールプレイの振り返りで、できている自分の姿を確認し、少しづつ自信をもち始めた。さらに、担任や保護者の後押しで、指導後半には自分から友達に話しかけることを実践し、記録（専用ノート）・報告した。
- ・最終日の感想：「友達に話しかけることはまだ苦手だけれど、話すと楽しかった。」

担任や保護者の協力のおかげで、Aさんは、友達に話しかけることができた自信と、会話の楽しさを感じることができました。

特別支援教室「すばる」における社会性指導の実践

特別支援教室「すばる」では，“他者の気持ちが分からない”，“場に応じた行動が難しい”，“会話のやりとりがうまくできない”といった社会性やコミュニケーションのつまずきに対する指導も行っています。個別学習において社会性の指導を行う際、場の状況や相手の気持ち、会話の展開など、実際場面では目に見えないものを見るかたちにすることで、お子さんが具体的に理解できるよう工夫しています。そこで今回は、社会性の指導で活用した教材および指導法を紹介します。

相手の気持ちを察することや、場の状況を正しく理解することが難しい中学1年生のAさんの指導では、ソーシャルスキルトレーニング絵カード（社会的・対人的な問題場面がイラストで描かれている絵カード）を使って、場面の状況理解を促し、適切な対応について考えられるようにしました。絵カードの状況が複雑になると、特定の場面が切り取られて描かれている絵カードでは、前後の文脈まで想像することが難しいようでした。そこで、絵カードの場面を含めたオリジナルの動画を作成しました。動画によって場面の展開が具体的に分かるようになり、当該場面の前後の状況や登場人物の気持ちを含めた、より正確な状況の理解につながりました。

状況や相手に合わせて会話をすることが苦手な小学4年生のBさんの指導では、会話に必要なスキルを具体的に指導し、指導者との実践練習を繰り返しました。まずBさんに必要な会話のポイントとして、「①笑顔でニコニコ話を聞く」「②相づちをうって話を聞く」「③言い方と話す量に気をつける」を挙げ、これらを絵や文字で示して意識できるようにしました。また、会話の様子を動画で撮影することで、自分の表情ややりとりのスムーズさ等を客観的に見て振り返ることができました。さらに、会話のやりとりを文字化して見えるかたちにしました（図1）。こうすることで、発話量や内容のつながり、相づちや適切な応答の有無を具体的に理解することができ、自分の改善点を意識しながら実践練習を積み上げることができました。

周囲からどう見られているかという意識が薄く、マイペースで行動する小学6年生のCさんの指導では、他者からの視点に意識が向けられるよう指導を行いました。具体的には、トラブルになっている二人とその周囲の人を描いたイラストを示すことで、周囲の人がそれを見てどう思うのかを想像できるようにしました（図2,3）。そして、Cさんが吹き出しに周囲の人の考え方や気持ちを書いた後、充分に気づけていない視点を指導者が書き加えました。周囲の存在を視覚化し、他者の視点に立って気持ちを想像する学習を重ねることで、少しずつ自分の言動に対する他者の評価について意識を向けられるようになりました。



図1:会話の視覚化



図2:先生が見た場合



図3:低学年の人人が見た場合

特別支援教室「すばる」の実践紹介

特別支援教室「すばる」で、漢字の習得に困難のあるお子さんに対して行った個別指導の実践を紹介したいと思います。

漢字を書く際、偏と旁や上下が逆になるなど、細部まで正確に覚えて書くことが難しい小学校4年生のA君。「門構え」や「しんにょう」の漢字をバランスよく書くことにも難しさがありました。アセスメントの結果から、A君は不注意傾向があり、文字や記号など抽象的なものの形や空間的な配置を正しくとらえることが苦手ということが分かりました。そこで、漢字を九九のようにリズムのよい唱え歌として声に出して覚えることで、聴覚から字形の記憶を促す指導を行いました。集中して学習できるように『特別支援の漢字教材 唱えて覚える漢字九九シート 初級・中級』(学研)を基に、必要な情報だけをプリントに載せて提示しました。プリントの手本の漢字を見て、漢字九九(「ハムを公園で食べよう」のような唱え歌)を唱えながら空書を数回した後、筆順アプリ『常用漢字 筆順辞典』を使って、iPadの画面上になぞり書きをしました。なかなか正しく覚えることのできなかった「整」の字は、漢字九九の中の「ハ、ケではらい」のところが強調できるように、イラストに出てくる「刷毛(はけ)」の実物を手に持たせて記憶を強化しました(図1参照)。指導最終日の書き取りテストでは、悩むことなく「整」を正しく書くことができました。

バランスよく書くことが難しい「しんにょう」については、図2のような手本を提示しました。「一番高いところから斜めに点。ちょっと下がって…くねくね(長さの目安として、最初は長く、次は半分、最後は長く)…一度止めて、伸ばしてシュッ・右と左はぶつかるくらいに」と、書くこつ(方向・位置・運動)を言葉や動作で表すことで運筆の方向やバランスを意識できるよう指導を行いました。



図1:語呂合わせ

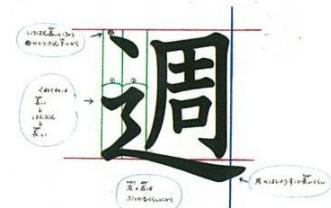


図2:しんにょうをバランスよく書く見本

前述の『唱えて覚える漢字九九シート』は小学校で学習する漢字の教材で、中学校で学習する漢字には対応していません。漢字を覚えることが難しく学習意欲が低下していた中学校2年生のBさんに対する指導では、漢字を自分が覚えやすいパートに分け、オリジナルの語呂合わせを考えて復唱することで、字形の記憶を促すことにしました。また、Bさんは言葉だけでの指示や説明を理解する力に弱さがあるので、語呂合わせに合ったイラストも自分で考えて、視覚からも漢字の形をイメージしやすくしました。語呂合わせやイラストを用いて自分なりに漢字に意味付けをして覚える工夫を学び、漢字を覚えるための自分に合った方略を身に付けることができました。

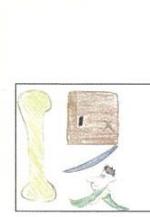


図3:考えた語呂合わせとイラスト

特別支援教室「すばる」の実践紹介

感情のコントロールが難しいお子さんに対して、特別支援教室「すばる」でおこなった個別指導の実践を紹介したいと思います。

衝動的に相手を攻撃し周囲の子とトラブルになったり、テレビを見過ぎることを注意されると家族に暴言や暴力が出たりする小学校1年生のA君。A君の家庭での過ごし方についてご家族や本人から話を聴くと、時間を意識せずだらだら過ごしていることが分かりました。そこで、自分の感情を理解し対処することと、注意される状況を減らすため、家庭での過ごし方を見直し自分の行動を意識して変えていくことを指導することにしました。

〈自分の感情を理解し対処すること〉

最初に『カンジョウレンジャー＆カイケツロボ』（エンパワメント研究所）のワークシートを用いて、うれしい・リラックス・怒り（イライラ）の気持ちやそれらの気持ちのときに起こる体の変化について考え、自分の状態を理解しているかを確かめました。A君がイライラした状態になりやすい場面を振り返らせ、イライラする気持ちの度合いの違いを気持ちメーター（感情の程度や強さに応じて5段階で表す）を使って表すよう促しました。このように数値化することで自己の感情を客観的に捉えることを支援し、早い段階でイライラした気持ちを自覚して対処できるようにしました。イライラしたときの対処法としては、いつでもどこでも実践できる腹式呼吸を指導しました。腹式呼吸の練習では、emWave2（パソコンモニターでの心拍数変化の確認をおこなえる装置）を活用しました。腹式呼吸をおこなっているときの状態がモニター上に波形で示されることにより、体の余分な力を抜いて呼吸できているかを確認することができ、徐々に自分で意識しながら腹式呼吸をおこなうことができるようになりました。また家庭でも、寝る前にご家族と練習を重ねたことで、上手に腹式呼吸をおこなうができるようになりました。呼吸の前後でイライラした気持ちの程度が変化したことを実感できるようになりました。

〈自分で意識して行動し生活リズムを作ること〉

A君はテレビをだらだら見続けることとするべきことが後回しになり、そのことで注意を受けると注意した相手に怒りをぶつけていました。注意を受ける状況を避けるため、本児自身の行動を変容させることに取り組みました。まずは、家庭での過ごし方を振り返り、行動の自覚を促しました。朝の身支度はお家の方にはほとんど手伝ってもらっていたので、何時までに何をするのか、何分間でどうするのか、時間を意識しながら自分で身支度をする練習から始めました。指導者と相談して1週間の目標を設定し、達成できたかどうかをチェック表に自分で記入するようにしました。チェック表を用いたことで達成感を味わうことができ、目標達成への意欲も高まりました。そして、着替えや起床は自分でできるようになりました。

次に、帰宅してから就寝するまでの時間を帯状のタイムテーブルで表し、何時までに何をするのかを決めて記入するようにしました。目に見えない時間をタイムテーブルに置き換えることで、だらだら過ごしていた時間の使い方を見直すことができ、晩ご飯やおやつを食べる時間に変化が見られるようになりました。

げんさいのイラマーター					いき様 じた	おなか ふくらみ	おひか へこみ	れんしゅう後のけいはー
1	2	3	4	5	○	○	○	1 2 3 4 5
とてもおだやかな気持ち	とてもはりつめた気持ち	とてもはりつめた気持ち	おだやかな気持ち	はりつめた気持ち				
1 2 3 4 5	○	○	○	○	1 2 3 4 5			
1 2 3 4 5	○	○	○	○	1 2 3 4 5			
1 2 3 4 5	○	○	○	○	1 2 3 4 5			

図1：腹式呼吸練習前後の変化

朝のみじめ自分でできる！									
1	お起きる	8:15あさごめん	お	お	お	お	お	お	お
2	うがいをする	お	お	お	お	お	お	お	お
3	きかえをする	10分	お	お	お	お	お	お	お
4	朝ごはんを食べる	お	お	お	お	お	お	お	お
5	はみがきをする	お	お	お	お	お	お	お	お
6	かおをあらう	お	お	お	お	お	お	お	お
7	トイレをはさまる	お	お	お	お	お	お	お	お
8	出づ	お	お	お	お	お	お	お	お
前日 8時 しゃべり 4:30 7時半から 8時半までにねる ふみがき 50分 8時半 おひる									

図2：朝の身支度チェック表

特別支援教室「すばる」の研究活動から

平成28年9月17日から19日の3日間、朱鷺メッセ他において日本特殊教育学会第54回大会が開催されました。“インクルーシブ教育の時代におけるSpecial Education”の大会テーマのもと、各種シンポジウムや口頭発表、ポスター発表が行われました。

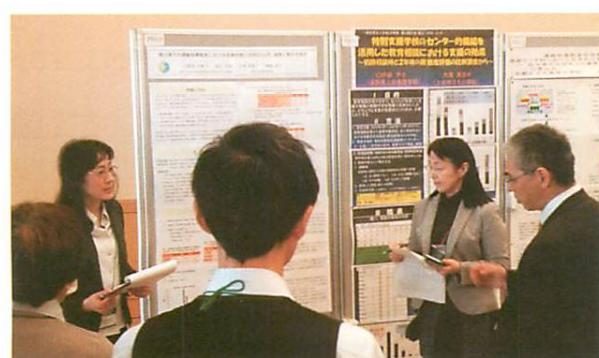
本教室からは、「漢字の形態分析に弱さが見られる児童への漢字指導」というテーマでポスター発表をしました。この研究では、漢字の形を細部まで見て形を捉えて書くことが難しい子どもに対し、漢字学習課題と漢字学習ではない細部への注意を意識的に向ける課題をセットで行うことで、漢字を正確に書くことができるか検討しました。新聞などで見かける「二つの絵の違い探し」を漢字学習ではない課題として使用しました。漢字の形を言葉にして覚える課題となぞり書き、絵の違い探しを指導したこと、対象児童は漢字を覚えて書くことができるようになりました。

当日の会場では、多くの先生方からご質問やアドバイスをいただきました。今後は、同様に書くことに難しさがある子どもたちにも有効な指導方法であるか検証し、研究を発展させていきたいと考えています。

The poster is titled "漢字の形態分析に弱さが見られる児童への漢字指導" (Instruction of Chinese characters for children with difficulty in morphological analysis). It includes sections on research objectives, methods, results, and conclusions. The results section shows a comparison between traditional Chinese character instruction and the proposed method, with illustrations of children working on tasks.

平成28年11月18日から20日の3日間、パシフィコ横浜において一般社団法人日本LD学会第25回大会が開催されました。本大会は、“発達障害の子どもと家族”的大会テーマのもと、講演会や各種シンポジウム、口頭発表、ポスター発表が行われました。

本教室からは、ポスター発表を2本行いました。2本のうち1本は、「香川県下の通級指導教室における指導形態と内容ならびに連携に関する現状」というテーマで発表しました。この研究では、香川県の通級指導教室の指導形態や教育課程等の現状を明らかにすることにより、通級指導の今後の課題について検討することを目的としました。具体的には、香川県内の小学校通級指導教室の担当者に対して、指導形態（自校通級、他校通級、巡回指導）や教育課程（「自立活動」と「教科の補充」）、個別の指導計画作成における教員間の連携や、他機関との連携等の内容について質問紙調査を実施しました。本発表では、調査の結果と今後の課題について報告しました。質疑応答では、参加者と他県の取組について情報交換を行うことができ、有意義な時間となりました。今後は、中学校に通級指導教室が設置されていない香川県において、通級対象児に対して継続した支援を実現するために、連携の必要性と方法について検討したいと考えています。



特別支援教室「すばる」で行っているアセスメントの紹介

特別な教育的ニーズのある子どもの個別指導を行う際に、子どもの状態や特性を把握するためのアセスメントは必要です。特別支援教室「すばる」で行っているアセスメントの一つとして、今回は目の動きを測定する装置（眼球運動測定装置）を利用した事例について紹介します。

はじめに、文字の形を捉えることに弱さをもつ児童の例です。正しい漢字と一部が異なった漢字を見比べて違いを探し出す課題中の目の動きを測定しました。下の図は、その測定結果の一例です。漢字の上の丸の数は視線を向けた回数、見ていた時間は丸の大きさで表されています。丸を結んでいる線は視線の動きです。この児童は、はらいなどの斜め線が一部異なる文字や線の重なりが多い文字のときに、違いを見つけ出すまでに時間がかかっていました。そのときの目の動きは、違うと思われる箇所を長く見続けていましたが、正確に見つけられずに何度も文字の上を視線が通過していました。なんとなく形が違うことは分かっているのですが、どのような形なのかを具体的に捉える難しさをもっていました。これらの測定結果から、視覚と触覚の両方を使いながら文字の形を捉えていくように支援をしました。また、学校に対しても、漢字の細部を捉えやすくするために文字を少し大きく書いて提示してもらうように依頼しました。



次に、目の動きがある条件下で抑制を失う児童の例を紹介します。文字や数字、線で描かれた物や動物の名前を声に出して答える課題中の目の動きを測定しました。答えがすぐ分かるときの視線は前を向いていますが、言葉を思い出すことが難しく答えに時間がかかるときに、視線を正面に向けておくことがとても難しいようでした。大人でも過去を思い出す質問に答えようとすると、視線は左上か右上のどちらかを一瞬向くことが知られています。本児は会話の相手からよそ見をしている、話を聞いていないと思われていることがあったようですが、その原因の一つとして、言葉を思い出すことが難しいときに懸命に記憶を探っていることが考えされました。

このように、目の動きから子どもたちがもっている特性の一部を垣間見ることができます。

私たちは、日常の生活の中で“見ること”を意識して行うことはあまりないかもしれません。なおさら、目の動きを意識的に制御することはないかと思います。子どもたちも同様に、教科書を読むため、黒板を書き写すため、友達の表情を読み取るために、意識的に目の動きを制御しているわけではありません。「目は口ほどにものを言う」と言われますが、目の動きを測定することで、子どもが今どのような状態であるかを知ることができます。

特別支援教室「すばる」で活用している教材の紹介

特別支援教室「すばる」で、イライラしたときに上手く対処をすることが難しいお子さんに対して行った個別指導の実践を紹介したいと思います。

怒りが抑えきれなくなると不適切な行動をとってしまう中学生のAさん。どのようなことにイライラするかの自己意識が低く、イライラを溜めてしまうと怒りが頂点に達すると考え、本人が実行できる対処法を指導しました。最初に、気持ちが高ぶったときの場面や体がどのように変化するのかを認識できることで、イライラしていることに気付けるようにしました。次に、イライラしたときの対処法として、①ゆっくり呼吸法、②ちょこっとメモ、③大好き図鑑にいっしょに取り組みました。

①ゆっくり呼吸法では、Aさんは緊張した状態で毎日を過ごしていることが多い、リラックスした状態を意識することができていなかったので、筋弛緩を行い脱力した状態を体感できるようにしてから、息をゆっくり吸ってゆっくり吐く呼吸法を行いました。そのときに、右図のemWave2（パソコンモニターでの心拍数変化の確認を行える装置）を使用し、心拍変化の状態を波形で示し、体の余分な力を抜いて呼吸をすることを分かりやすく示しました。パソコンモニターで変化の様子をすぐに確認できるので、自分で意識しながら、自信をもって呼吸法を行うようになりました。

emWave²



図1 emWave2

②「ちょこっとメモ」では、携帯しやすい大きさの記録用紙を用意し、生活の中で気になったことや、イラッとしたことをすぐに書き留め、イライラしていることに気付き、イライラを溜めないようにその場に合った対処法を選択して実践できるようにしました。また、あとからメモを見直しどう対処したらよいか一緒に考えることができました。

③大好き図鑑では、自分の好きな事柄をノートにスクラップしたり、書いたりしてためていくようにしました。イライラするなど気分が落ち着かないときに自分の好きなことを集めたノートを見ることで、気分を変えて落ち着くことができるようになりました。

気持ちが不安定で、登校を渋ることはありましたが、指導を行っていくと気持ちが徐々に安定し、「ちょこっとメモ」に書く内容が、イライラすることではなくうれしいことや面白かったことに変化していきました。

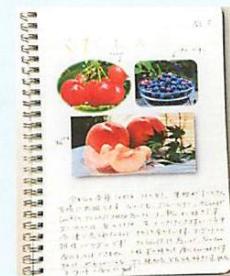


図2 大好き図鑑

また、自分と違う意見を受け入れることが難しく、納得できないことがあると大声で泣いたりすることがある小学生のBさん。「ハッピー日記」を書く指導を行いました。自分がうれしいこと、周りの人を喜させたことを絵日記に書いてためていくようにしました。自分の快感情を意識できるようにしたり、他者に目を向け自分とは違う好みや考えがあることに気付くよう促したりしました。当初は、過去にあったことを記入することが多かったのですが、日常の生活の中でうれしいと思ったことを記入するようになりました。また、保護者から、「相手を思いやる言葉が聞かれるようになりました」という報告がありました。



図3 『ハッピー日記』

特別支援教室「すばる」における運動スキルの指導

特別支援教室「すばる」では、お子さんの主訴や保護者の相談内容に応じて「運動スキルの指導」も実施しています。そこで、今回は、運動スキルの実践について紹介したいと思います。

特別支援教室「すばる」で個別指導を受けられているお子さんの中には、はさみやコンパスがうまく使えない、ラジオ体操や平均台渡りなどがうまくできないなど、手先の細かい動きや手足を使った大きな動きに「不器用さ」をもっている場合があります。「不器用さ」への支援としては、上半身全体の力を強化する運動や、自分の体の位置や動きについての身体意識やバランス能力を高める運動、体の両側を協調させながらこなせるような運動等を実施し、基礎的な運動スキルを高めています。

また、身体意識やバランス能力を高める指導では、前庭感覚（重力と動きに関する感覚）や固有受容感覚（身体の位置と動きに関する感覚）などの感覚器官に働きかける活動も取り入れた実践に取り組んでいます。

★運動スキル指導の様子

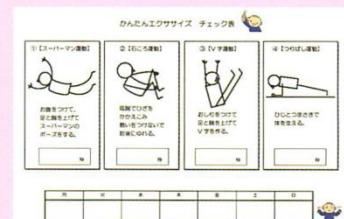


不安定なエアーマットの上から魚釣りをするゲームです。バランス能力や前庭感覚等に働きかける課題です。お子さんがゲームを楽しみながら、各運動スキルを高めることができるように配慮しています。魚を釣った後は、2本の支柱が半円形になった不安定な1本橋を、バランスを取りながら渡って帰ります。



陸上競技等の練習で使用する「ラダー」を活用し、指導者の声かけでケンケンパや両足の交差など、いろいろな足の動きをする課題です。身体の両側を協調させる運動スキル等を高める課題です。必要に応じて、「すばる」で取り組んだ課題を家庭でも取り組めるよう、運動のチェック表を持ち帰っています。

キャラクターのカードを強力な洗濯ばさみで留めていく課題です。指先を器用に動かす力を付けるための課題です。他にもジッパー袋に物を入れる課題、ピンセットやトングで物を移動させる課題等に取り組んでいます。



運動チェック表の例

★関連自作教材



魚釣りゲームに使っていた1本橋やiPad用の三脚パーツ、1本脚のバランスチェアは、スタッフの先生の手作りです。特にiPad用の三脚パーツは、指導者とのやり取りなど学習の様子を様々な角度から撮影できるため、その画像をお子さんに見せて即時にフィードバックすることが容易になり、大いに活用しています。

今後も、現在ある教材を有効活用するとともに、指導者やお子さんが活用しやすい物を必要に応じて作製しながら、支援を続けていきたいと思います。